

『徒然草』における漢籍受容の方法

— 『白氏文集』の場合 —

黄昱

一、はじめに

『徒然草』第十三段に、「文は、文選のあはれなる巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなる事多かり」と述べられるように、兼好法師は『文選』『白氏文集』『老子』『莊子』を漢籍の代表としてあげている。『徒然草』に見られる『白氏文集』の影響の大きさについてはすでにいくつかの先行研究があるが、その受容の実態についてはまだ諸説あり、未だ定説を見ない。

早くに、久保田淳氏、川口久雄氏^①は、『徒然草』に引用された『白氏文集』の詩句の多くは『和漢朗詠集』や『千載佳句』『源氏物語』などの先行古典作品に見られるものであり、直接に出典を『文集』に仰ぐかどうかを疑問とした。また同時に、久保田氏は「兼好の教養を考えれば、直接『文集』から出た表現が多いのではないか」と、兼好の漢学教養を考慮した考え方を示しているが、戸谷三都江氏、金文峰氏^②は、久保田氏の示した後者の考えを進め、『徒然草』の『文集』の受容は詩句の引用に止まらず、章段全体の主題や構想までその影響が見られると、『白氏文集』の直接的な影響を大いに想定している。

村上美登志氏^③は『徒然草』の漢籍受容に中世の和製類書を中間に置いたものが多々見られることを指摘した。これら中世に成立した和製類書にも『白氏文集』が取り上げられており、『徒然草』が受容した『文集』の文章と重なる部分が三箇所確認できる。『徒然草』の『白氏文集』受容を考える上には重要な指摘であるが、後述するように、

『徒然草』には、明らかに『白氏文集』を受容したと認められる部分が二一箇所あり、『白氏文集』の受容に関しては、原典或いは別の受容媒体を考慮に入れて考える必要がある。

これらの先行研究は『徒然草』が直接に『白氏文集』を受容したか否かに焦点を当てたもので、典拠を洗い出した基礎的な研究として有益ではあるが、『徒然草』における『白氏文集』受容に関して、部分的な引用、或いは全体の構想に関わる引用との区別を考えるだけでは、『徒然草』が『白氏文集』の受容を通して獲得した表現効果など、その受容の方法を全面的に把握できない恐れがある。さらに、『徒然草』の『白氏文集』受容を考える時、『源氏物語』は重要な中間的媒体となるが、『徒然草』の『源氏物語』受容について、稲田利徳氏が「自己の関心のある体験を、生活次元の生のままの描写せず、その対象を一度、自己の美的理念、思想、あるいは古典文学の世界を通過させて、再創造を試みるやりかたである」^④、「源氏」の珍しい語句や印象鮮明な場面を借用しながら、それから少し離陸し、兼好なりの新しい美意識や場面状況、人物造形を目論んでいたのではなからうか」^⑤と指摘されたように、兼好が先行の古典作品を受容する時、独自性を持つ文章表現を目指す意匠が見られる。『徒然草』の『白氏文集』受容も、その典拠や中間的資料を特定するのが難しいほど、こなれた引用方法をしている。

そこで、本発表は『徒然草』における『白氏文集』の受容例を指摘したこれらの先行研究の例を改めて検討し、その受容の方法と表現効果について考えたい。兼好が『千載佳句』『和漢朗詠集』の秀句撰や、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学、「文集百首」など和歌の世界を経由して『白氏文集』を撰取した具体的な方法とその作意を考察し、『徒然草』はこれらの中間的媒体を通して『白氏文集』を理解している傾向を分析する。

二、先行古典作品を中間媒体としての受容方法

『徒然草』に『白氏文集』を受容したと思われる部分は次の二十一箇所である。

第七段、第八段（二箇所）、第十九段（二箇所）、第二十九段、第三十段、第三十八段（三箇所）、第四十一段、第四十三段、第五十四段（二箇所）、第百五段、第百三十七段、第百四十二段、第百七十二段、第百七十四段、第百八十八段、第百三十五段の十六章段。

その内容を見ると、諷諭詩（巻一～巻四）が九首、感傷詩（巻九～巻十二）が一首、律詩（巻十四～巻二十・巻五十一～巻七十二）が十一首であり、閑適詩（巻五～巻八）の受容は見られない。これらの例の中には、第七段「夕陽に子孫を愛して」というように、『白氏文集』の詩句「夕陽愛子孫」を訓読した形で取り入れた場合もあり、『白氏文集』の中でも広く親しまれる「上陽白髮人」の一句「秋夜長、夜長無寐天不明」を第二十九段「人しづまりて後、長き夜のすさびに」に取り込むように、一見して『白氏文集』の文章が直接の典拠だとは気づかれないほど『文集』の漢詩文を和文化的に文章を綴った場合もある。こうした例は、前述する久保田淳氏（一九七〇）、川口久雄氏（一九七四）が『徒然草』の『白氏文集』の直接的な受容を疑問視するように、そのほとんどが『源氏物語』や『和漢朗詠集』などの先行古典作品に見えるものである。つまり、第七段・第二十九段の例は先行する古典作品を經由して『文集』を典拠とする表現を受容した可能性が高い。本章はまず、前述した金文峰氏（二〇〇一）の論文を踏まえ、中間的媒体と関わらせながら、『徒然草』が受容した『白氏文集』の例を考察したい。その受容の主な中間的媒体は『千載佳句』『和漢朗詠集』といった秀句撰・『源氏物語』・『文集百首』などの和歌との三つの節に分けて考える。

（一）『千載佳句』『和漢朗詠集』などの秀句撰の場合

先に示した『白氏文集』の影響が指摘できる二十一箇所のうち、『千載佳句』に取られた詩句は九箇所、『和漢朗詠集』

に取られた詩句は十二箇所見られる。『徒然草』の『文集』受容を考える際には、こういう秀句撰の影響は看過できない。

(1) 匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薰物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。(『徒然草』第八段)

為_レ君薰_二衣裳_一、君聞_二蘭麝_一不_二馨香_一。為_レ君盛_二容飾_一、君看_二金翠_一無_二顔色_一。(『白氏文集』卷三・諷諭三「新楽府・太行路 0134」)

為_レ君薰_二衣裳_一、君聞_二蘭麝_一不_二馨_一香_一。為_レ君事_二容飭_一、君見_二金翠_一無_二顔色_一。(『和漢朗詠集』卷下・恋・778)

『徒然草』第八段は人の心を惑わす色欲について説いた章段である。匂ひは一時的なものと知りながら、思わず魅力される人間の愚かさを描く時、「しばらく衣裳に薰物すと知りながら」という表現を用いた。これは『徒然草』最古の注釈書『寿命院抄』から指摘されてきたように、『白氏文集』「新楽府・太行路」の一句「為_レ君薰_二衣裳_一」を踏まえている。『文集』の中でも新楽府は平安時代からとくに愛好された部分で、この詩句は『和漢朗詠集』にも採られて^⑥、人口に膾炙したものと思われる。ただし、「太行路」は「借_二夫婦_一以_二諷_一君臣之不_レ終也」と題目の注にあるように、本来的には夫婦のことと以て人の定まらない心、そして君臣の関係を諷諭した詩であるが、『徒然草』はその中の、「為_レ君薰_二衣裳_一、君聞_二蘭麝_一不_二馨香_一」、君のために衣裳に香をたきしめても、愛情が薄くなった君がこの蘭麝の匂いをよい香りとしないう部分だけを借用し、白詩の意味とは逆に、衣服のよい匂いに惑わされる愚かな人間を描いている。これは、白詩の本意、さらに、『和漢朗詠集』の句の意味ともかけ離れた使い方であると言えよう。

(2) 「もののはあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。(『徒然草』第十九段)

黄昏獨立佛堂前、満_レ地槐花満_レ樹蟬。大抵四時心惣苦、就中腸断是秋天。(『白氏文集』卷十四・律詩「暮立0790J」)

大底四時心惣苦、就中腸断是秋天。(『千載佳句』卷上・秋興・177)

大底四時心惣苦、就中腸断是秋天。(『和漢朗詠集』卷上・秋興・223)

『徒然草』第十九段は四季の風物についての随想を述べた章段である。その美意識は和歌や、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学の流れを汲むものであるが、傍線部の「もののはあはれは秋こそまされ」という部分について、『野槌』などの古注は『白氏文集』「暮に立つ」を典故として指摘した。この白詩は『千載佳句』『和漢朗詠集』『源氏物語』にも採られて、著名な詩句であるが、現代の『徒然草』の諸注にも指摘されるように、秋はものの哀れを感じやすい季節という美意識は、『古今和歌集』に収められた「いつはとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事のかぎりなりける」(巻四・秋歌上「89」)に見られ、和歌の世界でも好まれた意趣である。注意されるのは、白詩は「苦」「腸断」という言葉を用いて、秋の悲しい気持ちを詠むが、『千載佳句』、『和漢朗詠集』はこの句を「秋興」に配置している。古注では、書陵部本『朗詠抄』(書陵部本系甲本)に「大底四一、此モ、遊覧ノ詩也。四季ニ随テ、心ヲ慰ムルコト、取リク也。(中略)取分、秋ハ興勝リ」と注を付しており、『和漢朗詠集仮名注』(書陵部本系乙本)に「惣題ニ合セ、春花_ハ花_ニ苦_ロノ心、夏_ハ郭公_ヲ待_ノ心、冬_ハ雪_ニ乗_{シテ}、何_レモ面白_キコトアレトモ、取_リ分、秋_ノ天_ニ、秋風_ノ落葉_ニ昆_{シテ}、管弦

ヲ成ス感情、面白ト也。但シ又、此義テハ、腸断ツコト、不レ聞。然トモ、面白紅葉ナトノチルニハ、ハラワタ断シ歎也」と記されておき、書陵部本系が特にこの問題に注目して、四季の慰みや面白みを説明している。書陵部本系朗詠注は室町初期以前の成立とされ、『徒然草』との前後関係は必ずしも明らかではないが、四季のとりどりの風情を述べていく『徒然草』第十九段の冒頭にこの秋に関する記述が置かれたことは、こういう四季の情緒を以てこの白詩を解説する朗詠古注の発想と軌を一にするものである。

(3) 人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりした、め、残し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきささびたる見出でたるこそ、ただその折のこちすれ。〔徒然草〕第二十九段)

妬令^三潜配^二上陽宮^一、一生遂向^二空房^一宿。秋夜長、夜長無^レ寐天不^レ明。耿耿残燈背^レ壁

影、蕭蕭暗雨打^レ窓聲。〔白氏文集〕卷三・諷諭三「新樂府・上陽白髮人 0131」)

耿耿殘燈背壁影、蕭々暗雨打窓聲。〔千載佳句〕卷上・雨夜・235)

秋夜長、夜長無^レ眠天不^レ明。耿耿殘燈背^レ壁影、蕭々暗雨打^レ窓聲。〔和漢朗詠集〕卷上・秋夜・233)

遲鐘漏初長夜、耿耿星河欲^レ曙天。〔和漢朗詠集〕卷上・秋夜・234)

燕子楼中霜月夜、秋來只為^二一人^一長。〔和漢朗詠集〕卷上・秋夜・235)

蔓草露深人定後、終宵雲尽月明前。〔和漢朗詠集〕卷上・秋夜・236)

『徒然草』第二十九段は古い手紙などを整理する時に催した懐旧の思いを述べた章段である。冒頭の文章について、三木紀人氏『徒然草全訳注』(一九九二)は『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られている『白氏文集』『上陽白髮人』

の一句「秋夜長、夜長無_レ眠天不_レ明」と、同じ『和漢朗詠集』巻上・秋夜の小野篁の詩句「蔓草露深人定後」の影響を指摘しているが、ほかのほとんどの注釈書がこの部分について典拠を挙げていない。しかし、右であげた533から始まる『和漢朗詠集』秋夜の部の詩文は、「人しづまりて後、長き夜」と続く『徒然草』本文の要素が含まれているだけではなく、長い秋の夜という、稲田利徳氏が指摘した「孤寂のなかに我が身を深く沈潜させ、現在おかれている自己をとりまく状況の一切を捨象した時間帯」⁹が帯びた哀愁な情緒も一致している。ちなみに、『狭衣物語』に、「文のけしきなども、ただおほかたに思はせたるなつかしさをば、おろかならぬさまにいひなさせ給へるさまなども、さし向ひ聞えさせたる心地のみせさせ給ひて、いとど御とのごもるべうもなければ、「燕子楼の中」とひとりごたれ給ひつつ、丑四つと申すまでになりけり」という、秋の長い夜に、狭衣帝が源氏の宮からの手紙を読んでしみじみと懐かしさと恋しさを覚える場面がある。手紙を読むことで相手と対面するような気持ちになれるという『徒然草』第二十九段と近似する状況に「燕子楼中霜月夜」の一句が引用されており、王朝文学にすでに寂しい秋夜に一人で手紙を読み、寂寥たる情緒に沈む文脈と『和漢朗詠集』秋夜の漢詩文の接点が見られた。第二十九段はこのように、物語と『和漢朗詠集』秋夜の一連の詩文に見られる情緒との近似性が注意される。

(4)春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過しがたきを、さし入りて見れば、南面の格子、皆おろしてさびしげなるに、東に向きて妻戸のよきほどにあきたる。(『徒然草』第四十三段)

貌随_レ年老欲_二何如_一、興遇_レ春牽尚有_レ餘。遙見_二人家_一花便入、不_レ論_三貴賤與_二親疎_一。(『白氏文集』巻六十六・律詩「又題」一絶「3241」)

遙見「人家」花便入、不_レ論_三貴賤與_三親疎。〔『千載佳句』卷下・雜花・664〕
遙見「人家」花便入、不_レ論_三貴賤與_三親疎。〔『和漢朗詠集』卷上・花・115〕

『徒然草』第四十三段は趣ある家で風情ある若い男性を垣間見した話である。『壽命院抄』などの諸古注が『千載佳句』『和漢朗詠集』にも見られる『白氏文集』の一句「遙見「人家」花便入」を典拠としてあげたが、現代の諸注にはあまり受け継がれていない。前述した金文峰氏論文（二〇〇二）はこの白詩とその前の一首「尋_レ春題_三諸家園林」の詩句「聞_レ健朝朝出、乘_レ春処処尋。天供_三閑日月、人借好_三園林」をあげ、第四十三段全体の発想にこの両首の白詩の影響が見られると指摘している。表現上に相違が見られるものの、春のどこかで優艶なひよりに、賤しからぬ家の庭に散り敷く花に魅力されて、つい人の家に入ってしまったという設定の一致性から見て、金氏の指摘は的を射たものであろう。第四十三段は、『源氏物語』などの王朝文学に散見する表現と美意識を用いながらも、『白氏文集』の漢詩のストーリー性を読み取り、物語的な一段に作り上げた。

(5) 風流の破子やうのもの、ねんごろにいとなみ出でて、箱風情の物にしたため入れて、双の岡の便よき所に埋み置きて、^①紅葉散らしかけなど、思ひ寄らぬさまにして、御所へ参りて、児をそのかし出でにけり。うれしと思ひて、ここかしこ遊びめぐりて、^②ありつる苔のむしろに並みゐて、「いたうこそこうしにたれ。^③あれ紅葉を焼かん人もがな。験あらん僧たち、祈りこころみられよ」など言ひしろひて。〔『徒然草』第五十四段〕

① 不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。莫_レ恠獨吟秋思苦、比_レ君校近二毛年。〔『白氏文集』卷十三・律詩「秋雨
中贈_三元九_一（0620）」〕

不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。（『千載佳句』卷上・暮秋・201）

不堪紅葉青苔地、又是涼風暮雨天。（『和漢朗詠集』卷上・紅葉・301）

② 林間煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔。惆悵旧遊無復到、菊花時節羨君迴。（『白氏文集』卷十四・律詩「送王十八歸山」寄題仙遊寺「0715」）

林間煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔。（『千載佳句』卷下・詩酒・799）

林間煖酒燒紅葉、石上題詩掃綠苔。（『和漢朗詠集』卷上・秋興・221）

『徒然草』第五十四段は仁和寺の法師たちが稚児を喜ばそうとして、『白氏文集』の「林間煖酒燒紅葉」の風情を習って、野遊びを計画したが失敗した話である。この章段では二箇所『白氏文集』からの影響が見られる。傍線①の「紅葉散らしかけなど」と「ありつる苔のむしろ」という、紅葉を散らかし、苔が生えている計画の舞台は『千載佳句』『和漢朗詠集』などに見られる白詩「不堪紅葉青苔地」を下敷きにした風景であり、傍線②の「あはれ紅葉を焼かん人もがな」は同じ『千載佳句』『和漢朗詠集』に見られる白詩「林間煖酒燒紅葉」を踏まえた表現である。なお、この章段はこれらの詩句を用いて、笑いのおかしみを引き出すものであるが、①の白詩「秋雨中贈元九」は秋の寂寥たる風景とともに老年の憂いを嘆いた詩である。『徒然草』はこのような白詩を仁和寺の法師の滑稽談に用いたのは、やはり原詩からかけ離れた修辭的な受容方法であるが、その背景に、「不堪者、紅葉、青苔、上チリカ、ルハ、不堪、面白也」という白詩が描いた景色に注目した国会図書館本『和漢朗詠注』などの朗詠古注の存在が想起される。

(6) 人事多かる中に、道を楽しぶより気味深きはなし。これ、実の大事なり。一たび道を聞きて、これにこころざさん人、いづれのわざか廢れざらん。(『徒然草』第百七十四段)

老来生計君見取、白日遊行夜醉吟。陶令有_レ田唯種_レ秫、鄧家無_レ子不_レ留_レ金。人間榮耀因緣淺、林下幽閑気味深。煩慮漸銷虛白長、一年心勝_二一年心_一。(『白氏文集』卷六十六・律詩「老来生計」3298)

人間榮耀因緣淺、林下幽閑気味深。(『千載佳句』卷下・幽居・1015)

人間榮耀因緣淺、林下幽閑気味深。(『和漢朗詠集』卷下・閑居・617)

『徒然草』第百七十四段は仏道に志すことを勧めた章段である。「道を楽しぶより気味深きはなし」の一文は老年の生活を描いた『白氏文集』「老来生計」の詩句「林下幽閑気味深」を踏まえた表現である。白詩は「因縁」などの仏教用語も見られるが、「虚白」というような『莊子』のことばも詠み込んでおり、必ずしも仏教的な意味合いが強いものではなく、「白日遊行夜醉吟」というような自由な老後の閑居生活を描いている。しかし、『和漢朗詠集』の諸古注はこの詩句を仏教的な文脈で解釈している。

人間、者、人間_ノ榮樂_ハ、皆是_レ、電光朝露_ノ如_{クニ}、アタナル果報ナレハ、因縁淺_ト云也。林下_ノ幽閑_ト者、背代_ヲ、山林人_ハ、後世菩提_ニ心_ヲカクル故_ニ、是_レ、実_ノツトメナレハ、気味深_{シト}云也。(後略)(国会図書館本『和漢朗詠注』見聞系丙本・484/617)

人間_一、(中略) 下句、林下_ニ坐禪ナトスレハ、万慮、一時_ニ収リ、チ、ノ乱、刹那_ニ滅ス。故_ニ、禪居コトシナリ。是、出離覺悟_ノ要路也。故_ニ、気味深_ト云。白居易作。(書陵部本『朗詠抄』書陵部本系甲本・440/617)

人間ノ榮耀ハ、因縁淺シ、林下ノ幽閑ハ、気味深シ
白

(中略) 下旬ハ、イマハ、ヤマ、ハヤシニ、コモリキタルコトノミヲ、コノミニオヘルワサニテアルト云也。(『和

漢朗詠集永濟注』・439)

兼好がこの一句を仏道を勧める文章として取り入れたのは、このような朗詠古注の解釈に近い解釈を示している。前述した第十九段・四十三段・五十四段と本段はいずれも朗詠古注の影響が指摘できる。また、筆者は以前『徒然草』第二十五段「桃李もの言はねば」の表現と漢故事「桃李不言、下自成蹊」との受容関係について永濟注の影響を論じた^①ことがある。このように、『徒然草』が『和漢朗詠集』を経由して漢詩文を撰取した際、朗詠古注と近い理解を示していることがわかる。

以上、『千載佳句』『和漢朗詠集』といった秀句撰に取り入れられている『白氏文集』と『徒然草』が受容した『白氏文集』と重なる部分について見てきた。『徒然草』の受容した『白氏文集』の巻数を見ると、巻一から巻六十六まで及び、広い範囲を受容している印象が残るが、前述した久保田淳氏(一九七〇)、川口久雄氏(一九七四)、金文峰氏(二〇〇一・二〇〇二)の論文に指摘されたように、その半分以上がこれらの秀句撰によって人口に膾炙している詩句を撰取していると考えられる。その受容態度は、『白氏文集』の原典から離陸して、朗詠古注の理解に近いもの、或いは、『徒然草』の本文の文脈に沿うように白詩の表現だけを借用したものがほとんどであると言える。

(二) 『源氏物語』の場合

『徒然草』に受容される『白氏文集』の中、『源氏物語』に受容される『白氏文集』と重なるものは八箇所見られる。本節はこれらを取り上げ、『徒然草』が『源氏物語』の世界を通して『白氏文集』を受容する様相を考察する。

(1) そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人に出でまじらはん事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世をむさぼる心のみふかく、ものあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。(『徒然草』第七段)

可^レ怜八九十、齒墮雙眸昏。朝露貪^二名利^一、夕陽憂^二子孫^一。掛^レ冠顧^二翠綾^一、懸^レ車惜^二朱輪^一。金章腰不^レ勝、
僵^レ儂入^二君門^一。誰不^レ愛^二富貴^一、誰不^レ恋^二君恩^一。年高須^レ請^レ老、名遂合^レ退^レ身。(『白氏文集』卷二・諷諭二・秦
中吟・不致仕 0079)

明け方も近うなりにけり。鶏の声などは聞こえて、御岳精進にやあらん、ただ翁びたる声に額づくぞ聞こゆる。起居のけはひたへがたげに行ふ、いとあはれに、朝の露にことならぬ世を、何をむさぼる身の祈りにかと聞き給ふ。(『源氏物語』夕顔)

「齢などこれよりまさる人、腰たへぬまで屈まり歩く例、昔も今もはべめれど、あやしくおれおれしき本性に添ふものうさになむはべるべき」など聞えたまふ。(『源氏物語』行幸)

太政大臣、致仕の表奉りて、籠りたたまひぬ。「世の中の常なきにより、かしこき帝の君も位を去りたまひぬるに、年ふかき身の冠を掛けむ、何か惜しからん」と思しのためふべし。(中略) 院の御齡足りたまふ年なり、人よりさだかに数へたてまつり仕うまつるべきよし、致仕の大臣思ひおよび申されしを、冠を掛け、車を惜まず棄ててし身にて、進み仕うまつらむにつく所なし。(『源氏物語』若菜下)

『徒然草』第七段は無常を述べた章段である。『寿命院抄』以降諸注に指摘されてきたように、生に執着する醜い老人の姿を描いた文脈で、同じ趣旨の『白氏文集』「不致仕」の詩句を引用している。ただし、直線で示したように、

白詩では「夕陽憂^三子孫」とある部分を、『徒然草』は「ゆうべの日に子孫を愛す」としている。『白氏文集』に「愛」と作る本文はないので、ここは兼好の記憶間違いか、ほかに「愛」に作る本文があるのかがまず問題となる。『徒然草全注釈』¹²には『観心略要集』に「朝露之底貪^三名利」、夕陽之前愛^三子孫」とする例があると指摘されており、日本における変容にも注意する必要がある。『源氏物語』夕顔の巻の一文「朝の露にことならぬ世を、何をむさぼる身」は「不致仕」の「朝露貪^三名利」を受容したものであるが、この一文について、『源氏物語』の古注釈は、『紫明抄』あたりから「不致仕」の詩句を典拠としてあげているが、『紫明抄』が引用する白詩の本文は「朝露貪^三名利」、夕陽愛^三子孫」¹³となっている。本文中に波線で示したように、『文集』「不致仕」はほかに、『源氏物語』の行幸と若菜下の二巻にも引用され、二箇所とも年老いてもなお官職にしがみついている人の見にくさを諷諭するという白詩の主旨をよく理解する上での引用である。前述する戸谷三都江氏（一九七四）や金文峰氏（二〇〇二）の論文は『徒然草』第七段全体に『文集』「不致仕」の影響を強調するが、夕顔の例を入れて、『源氏物語』に三回も本詩を引用しており、さらに、『紫明抄』などの注釈書にも言及されている。『源氏物語』を写したこともある¹⁴兼好の目には止めた可能性が大きいではなからうか。ただし、兼好がここで用いたのは、『源氏物語』本文には採らなかつた一句であり、『源氏物語』を通過させて、『白氏文集』原典の世界もここに投影させるという重層的な受容方法に兼好の意匠が認められる。

(2)世の人の心まどはす事、色欲にはしかず。人の心は愚かなるものかな。

句ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ句ひには、必ず心ときめきするものなり。（『徒然草』第八段）

假色迷^レ人猶若^レ是、真色迷^レ人応^レ過^レ此。彼真此假俱迷^レ人、人心惡^レ假貴^レ重真^レ。狐假^レ女妖^レ害猶淺、一朝一夕迷^レ人眼^レ。女為^レ狐媚^レ害即深、日長月長溺^レ人心^レ。(『白氏文集』卷四・諷諭四「新樂府・古塚狐」0169)

「げに、いづれか狐なるらんな。ただはかられたまへかし」となつかしげにのたまへば、女もいみじくなびきて、さもありぬべく思ひたり。(『源氏物語』夕顔)

いと若ううつくしげなる女の、白き綾の衣一襲、紅の袴ぞ着たる、香はいみじうかうばしくて、あてなるけはひ限りなし。(中略) 身にもし疵などやあらむとて見れど、ここはと見ゆるところなくうつくしければ、あさましくかなしく、まことに、人の心まどはさむとて出で来たる仮の物にやと疑ふ。(中略) 閨のつま近き紅梅の色も香も変わらぬを、春や昔のと、こと花よりもこれに心寄せのあるは、飽かざりし匂ひのしみにけるにや。(『源氏物語』手習)

『徒然草』第八段は前節にも述べたが、ここでは、『源氏物語』に引用された『白氏文集』の関係で別の箇所を取り上げる。この部分について、『寿命院抄』からの諸注が『白氏文集』「古塚狐」の影響を指摘しており、『源氏物語』夕顔と手習の二卷に「古塚狐」の影響が見られることが『紫明抄』など『源氏物語』の古注釈に指摘されている。先述した金文峰氏の論文(二〇〇二)は『徒然草』第八段全体に『白氏文集』「古塚狐」の影響が見られると強調するが、第八段は「古塚狐」に見られない「匂い」を取り上げている。手習の巻に、「香はいみじうかうばしくて」という浮舟の姿や、梅の花の香りで「飽かざりしにおひ」を衣服に焚きしめた昔の恋人を思い出した浮舟の心情を描いている。何より、浮舟と薫、匂宮三人の悲恋を物語った手習の巻は、二人の男性の名前にも表しているように、

「匂い」がキーワードになっている。『徒然草』第八段は女性を対象としているが、この章段が『白氏文集』『古塚狐』を用いて色欲が仮のものに過ぎないと戒めた際、「匂い」を例としてあげたのは、『源氏物語』手習の巻の世界を連想させる。ここも『徒然草』が『源氏物語』を中間的媒介に『白氏文集』を受容した好例である。

(3)人しづまりて後、長き夜のすさびに、なにとなき具足とりした、め、残し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折のこちすれ。このころある人の文だに、久しくなりて、いかなる折、いつの年なりけんと思ふは、あはれなるぞかし。手なれし具足なども、心もなくて変らず久しき、いと悲し。(『徒然草』第二十九段)

秋夜長、夜長無寐天不明。耿耿残燈背壁影、蕭蕭暗雨打窓聲。春日遲、日遲獨坐天難暮。(『白氏文集』)

卷三・諷諭三「新樂府・上陽白髮人(0131)」

おどろおどろしう降り来る雨に添ひて、さと吹く風に灯籠も吹きまどはして、空暗き心地するに、「窓をうつ声」など、めづらしからぬ古言をうち誦じたまへるも、をりからにや、妹が垣根におとなはせまほしき御声なり。「いみじうも積りにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただそのをりの心地するに、御かたはらのさびしきも、いふ方なく悲し。(中略)落ちとまりてかたはなるべき人の御文なども、「破れば惜し」と思されけるにや、すこしづつ残したまへりけるを、もののついでに御覧じつけて、破らせたまひなどするに、かの須磨のころほひ所どころより奉りたまひけるもある中に、かの御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。みづからしおきたまひけることなれど、久しうなりにける世のことと思すに、ただ今のやうなる墨つきなど、げに千年の形見にしつべかりけるを、見ずなりぬべきよと思せば、かひなくて、疎からぬ人々二三

人ばかり、御前にて破らせたまふ。(『源氏物語』幻)

『徒然草』第二十九段も前節で取り上げたものであるが、『千載佳句』『和漢朗詠集』に見られる『文集』の秀句を『源氏物語』幻の巻に源氏が口ずさむこととなる。紫上を失った源氏が俗世を捨てる時期が近づいたことを覚悟して、昔の手紙などを処理している時、亡くなった紫上を思い出して悲しんでいる場面である。「破れば惜し」と思って残しておいた手紙を破って捨てる時、手紙をもらった当初の気持ちを出すという発想は、『徒然草』第二十九段の「残し置かじと思ふ反古など破りすつる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたる見出でたるこそ、ただその折のこちすれ」とまさに一致している。そして、亡くなった故人の遺品だけではなく、久しく会っていない友人の手紙などを見ても、あはれ・悲しみの気持ちが生じてくるという発想とその文章表現とも『枕草子』や『無名草子』からの投影が見られる^④。このような表現と場面の近似性から、『白氏文集』の原典よりむしろ、『寿命院抄』などの諸古注から指摘されてきた『源氏物語』幻の巻や『枕草子』『無名草子』、そして前節であげた『狭衣物語』というような王朝文学の世界がその発想の源であると考えられる。もちろん、その背後にさらに「上陽白髮人」のストーリー、及び『和漢朗詠集』秋夜の漢詩文を連想させることで、寂寥たる長い秋の夜の情緒を引き出す働きがあり、白詩、『和漢朗詠集』と物語の世界の重層的な引用方法となっている。

(4)望月のくまなきを千里の外までながめたるよりも、暁ちかくなりて待ち出でたるが、いと心ぶかう、青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる、木の間の影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎柴・白檜などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、

都恋しう覺ゆれ。(『徒然草』第三百二十七段)

銀台金闕夕沉沉、獨宿相思在_二翰林_一。三五夜中新月色、二千里外故人心。渚宮東面煙波冷、浴殿西頭鐘漏深。猶恐清光不_二同見_一、江陵卑濕足_二秋陰_一。(『白氏文集』卷十四・律詩「八月十五日夜禁中獨直對_レ月憶_二元九_一」0724)

月のいとはなやかにさし出でたるに、今宵は十五夜なりけりと思し出でて、殿上の御遊び恋しく所どころながめたまふらむかしと、思ひやりたまふにつけても、月の顔のみまもられたまふ。「二千里外故人心」と誦じたまへる、例の涙もとどめられず。(『源氏物語』須磨)

『徒然草』第三百二十七段は物の見方と美意識及び無常の認識について論じた長文である。山里の月夜の風景を描く文章に『白氏文集』の有名な一句「三五夜中新月色、二千里外故人心」を和文化して取り入れている。この一句は『和漢朗詠集』や『平家物語』『増鏡』^⑤にも採られる名句であるが、『源氏物語』須磨の巻に源氏が口ずさむ一句として見られる。

(5)ぬしある家には、すすろなる人、心のままに入り来る事なし。あるじなき所には、道行人みだりに立ち入り、狐ふくろふやうの物も、人げに塞かれねば、所得顔に入りすみ、木霊などいふ、けしからぬかたちもあらはるるものなり。(『徒然草』第二百三十五段)

長安多_二大宅_一、列在_二街西東_一。往往朱門内、房廊相對空。梟鳴_二松桂枝_一、狐藏_二蘭菊叢_一。蒼苔黃葉地、日暮多_二旋風_一。(『白氏文集』卷一・諷諭一「凶宅詩」0004)

こはなぞ、あなもの狂ほしのもの怖ぢや、荒れたる所は、狐などやうのもの人おびやかさんとて、け恐
しう思はするならん。(中略) 夜中も過ぎにけんかし、風のやや荒々しう吹きたるは。まして松の響き木深く
聞えて、気色ある鳥のから声に鳴きたるも、梟はこれにやとおほゆ。(『源氏物語』夕顔)

もとより荒れたりし宮の内、いとど狐の住み処になりて、疎ましうけ遠き木立に、梟の声を朝夕に耳馴ら
しつつ、人げにこそさやうのものもせかれて影隠しけれ、こ木霊など、けしからぬ物ども所を得てやうやう
形をあらはし、ものわびしき事のみ数知らぬに。(『源氏物語』蓬生)

『徒然草』第二百三十五段は心の実体の有無について論じた章段である。狐・梟が住む荒れた家を描くために、本
文中に直線で示した『白氏文集』「凶宅」の一句を引用している。『源氏物語』夕顔と蓬生の巻にこの詩句を踏まえ
た表現が見られることが『紫明抄』『河海抄』などの古注釈に指摘されている。また、戸谷三都江氏(一九七四)と
金文峰氏(二〇〇二)が前掲論文において論じられたように、波線で示した『徒然草』第二百三十五段のほかの部
分にも『源氏物語』の影響が見られるなど、ここも『徒然草』が『源氏物語』の世界を通して、重層的に『白氏文
集』を受容した一例である。なお、戸谷氏と金氏は「人凶非宅凶」という『文集』「凶宅詩」の主題に注目して、第
二百三十五段全体の構想にこの白詩の影響影響が認められると指摘したが、戸谷氏も言及したように、第二百三十五
段は家を例として心の問題を論じた仏教思想の影響が強い章段である。自己の内奥である心を問題とした『徒然草』
第二百三十五段と、「人凶」が国を滅ぼす原因にもなると諷諭した『白氏文集』「凶宅詩」とは主題・構想の一致性
を認めてよいだろうか。むしろ、『源氏物語』にも引用された『白氏文集』の有名な表現を用いて、『徒然草』独自
の思想を述べたものと位置づけたほうが妥当ではなからうか。

『源氏物語』には、『白氏文集』が多く引用されており、諷諭性などの思想を撰取した部分も見られるが、『徒然草』に受容された『白氏文集』と『源氏物語』に受容された『白氏文集』が重なる八例を見ると、思想性の受容が見られず、八例の中の五例は『源氏物語』の作中人物が口ずさんだ『文集』の有名な詩句である。つまり、『源氏物語』の場面を想起させる白詩を受容する本歌取りの方法である。このように、『徒然草』の『文集』受容は、『源氏物語』の世界を通して、原典だけではなく、その中間的媒体である『源氏物語』などの王朝文学も投影させて、重層的な受容方法を示している。

(二) 和歌の場合

金文峰氏(二〇〇一)の前掲論文にも指摘されたように、『徒然草』が受容した『白氏文集』の詩句の中、『徒然草』に先行する和歌にもよく詠まれたものが少なからず見られる。本節は『徒然草』が受容した『白氏文集』の文章表現と和歌に詠まれた『白氏文集』との関係について考察する。

- (1) 「^①もののはあはれは秋こそまされ」と、人ごとに言ふめれど、それもさるものにて、いま一きは心も浮きたつものは、春のけしきにこそあめれ。鳥の声などもことの外に春めきて、のどやかなる日影に、墻根の草もえいづるころより、や、春ふかく霞みわたりて、花もやうやうけしきだつほどこそあれ、折しも雨風うちつきて心あわたしく散り過ぎぬ。(中略)「灌仏のころ、祭のころ、^②若葉の梢涼しげに茂りゆくほどこそ、世のあはれも、人の恋しさもまされ」と、人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、あやめふくころ、早苗とるころ、水鶏のたぐなど、心ほそからぬかは。六月のころ、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣火ふすぶるもあはれなり。六月葎またをかし。(『徒然草』第十九段)

①黄昏獨立佛堂前、満_レ地槐花満_レ樹蟬。大抵四時心摠苦、就中腸断是秋天。(『白氏文集』卷十四・律詩「暮立0790」)

「文集百首」秋

大底四時心物苦、就中腸断是秋天

あだに思ふうれへは秋の空ながら雲に心やなびき行くらむ(『拾玉集』1934)

大底四時心物苦、就中腸断是秋天

さくら花山郭公雪はあれどおもひをかぎる秋はきにけり(『拾遺愚草員外』434)

②閑有_二老僧立_一、静無_二凡客過_一。殘鶯意思尽、新葉陰涼多。(『白氏文集』卷九・感傷一「青竜寺早夏0414」)

「文集百首」夏

殘鶯意思尽、新葉陰涼多

鶯の夏のはつねをそめかへてしげき梢にかへるころかな(『拾玉集』1923)

新葉陰涼多

陰しげきならの葉がしは日にそへてまどより西の空ぞ少き(『拾遺愚草員外』423)

①の傍線部は前述したものであるが、四季の中に秋が最もあはれな心情を引き出す季節であるという美意識は『古今和歌集』巻四・秋上の歌「187いつとは時はわかねど秋のよぞ物思ふ事のかぎりなりける」などからよく知られるものである。さらに『千載佳句』『和漢朗詠集』にも採られた白詩の一句「大抵四時心摠苦、就中腸断是秋天」は「文集百首」に句題として選ばれている。「文集百首」は建保六年(一一二八)に慈円・定家・寂身が『白氏文集』の詩

句を句題に詠んだ百首であり、②の傍線も同じ「文集百首」に詠まれた『白氏文集』『青竜寺早夏』の一句を踏まえている。「梢」「しげき」などの表現の一致性から、この部分の受容は原典だけではなく、「文集百首」の表現の影響も認めてよいであろう。

(2)埋もれぬ名を長き世に残さんこそ、あらまほしかるべけれ。位高く、やんごとなきをしも、すぐれたる人とははいふべき。(『徒然草』第三十八段)

遺文三十軸、軸軸金玉声。龍門原上土、埋骨不埋名。(『白氏文集』卷五十一・格詩歌行雜体「題二故元少尹集後二首その二2217」)

小式部内侍うせて後、上東門院より年ごろ賜はりける衣を亡き後にも遣はしたりけるに、小式部と書き付けられて侍りけるを見てよめる 和泉式部

もろともに苔の下には朽ちずして埋もれぬ名をみるぞ悲しき(『金葉集』卷第十・雜部下・620)

文治の頃ほひ、父の千載集撰び侍りし時、定家がもとに遣はすとてよみ侍りける 尊円法師

わがふかくこけのしたまでおもひおくうづもれぬ名はきみやのこさむ(『新勅撰集』卷第十七・雜歌二・1192)
としをへて暮行くとしはつもれどもうづもれぬ名はまたとまりつつ(『拾玉集』)

「歳暮舍利報恩会聴講分別品和歌」4260)

天

見ず知らぬうづもれぬ名の跡やこれたなびきわたる夕暮の雲(『拾遺愚草』「詠百首和歌」707)

『徒然草』第三十八段の「埋もれぬ名」は『和漢朗詠集』にも採られる『白氏文集』「題二故元少尹集後二首その

二」の一句「埋^レ骨不^レ埋^レ名」を踏まえたことは第一節に述べたが、実は「埋もれぬ名」という言葉は『金葉集』に見られる小式部の死を悲しむ和泉式部の和歌以来、右であげた『新勅撰集』尊円法師の和歌や、『拾玉集』『拾遺愚草』の和歌に散見するものであり、歌語として定型化している。『徒然草』が受容した『文集』の表現の中、こういう和歌に多く詠まれたものは少なくない。

以上のように、『徒然草』が受容した『白氏文集』の詩句が和歌にも詠まれた例を見てきた。中には、『白氏文集』の表現が和歌に多く詠まれて定型化した歌語になっている言葉や美意識を取り入れたものや、白詩の原典ではなく和歌に詠まれた変容した形の表現を用いたものが少なからず見られる。『徒然草』はこういう和歌の世界のプリズムを通して『白氏文集』を受容したことが認められる。

三、まとめ

このように、『徒然草』に受容された『白氏文集』の用例二十一箇所を分析した。その中、『千載佳句』『和漢朗詠集』などの秀句撰の『文集』受容と重なるものが十二例、『源氏物語』『枕草子』などの王朝文学の『文集』受容と重なるものが八例、和歌の『文集』受容と重なるものは同じ八例あり、いずれも大きな比率を示しており、『徒然草』の『白氏文集』受容は、先行の古典作品に大いに依拠していることがわかる。また、『白氏文集』の原典の意味や用法から離れて、白詩の表現だけを借用して独自の趣旨を述べる方法や、和歌において定着した表現或いは変容した表現を取り入れる方法が目立つ。そして、『徒然草』の『白氏文集』受容例を分析すると、『和漢朗詠集』とその古注や、『源氏物語』とその古注の『文集』理解に近いものが確認できる。つまり、『徒然草』はこれら中間的媒体を通して『白氏文集』を理解している傾向が見られる。兼好が『徒然草』の文章を執筆する際、前述した稲田利徳氏のご論考に

指摘されたように、先行の古典作品を取り入れながらも、独自の意匠を凝らす傾向が見られる。『白氏文集』を受容する時も、引用箇所は先行する日本の古典作品とほぼ重なるが、『白氏文集』の原典だけではなく、それを受容した先行の古典文学作品の世界も投影させて、重層的な引用・享受方法となっている。このように、漢文脈の『白氏文集』の文章表現を和文脈に自然に織り成し、『徒然草』本文の意趣に沿うように新たな文章を作り出したところに、兼好の意匠と筆力が認められよう。

さらに、『徒然草』の『白氏文集』受容例を見ると、二十一箇所のうち、諷諭詩を九首撰取しているが、白詩の諷諭的な性格が見られず、美意識を現す叙情表現としてなど、その表現だけを受容するものがほとんどである。『白氏文集』、特に新樂府は平安時代以来盛んに読まれてきたが、主にその美しい文章とストーリーが愛好された。鎌倉時代に入ると、その諷諭性・教訓性が重視する動きがあった。例えば、永仁三年(1295)写の『管見抄』奥書に「古今之間、縑素之類、抄_二出此集_一、雖_レ多_二其人_一、皆為_二春花_一而抄_二出之_一、為_二秋実_一而不_レ抄_レ之。於今抄者、指婦異_レ之。先抽_二治政之要_一、是依_レ可_レ補_二私務_一也。次採_二齊物之詞_一、是依_レ可_レ養_二己志_一也。後拾_二風月之章_一、是依_レ可_レ悅_二我目_一也」^⑭とあり、太田次男氏も指摘したように、「新樂府は唐代に於ては勿論のこと、わが国に伝来しては、平安以来異常なまでの盛行をみたが、それは主として美的側面の愛好によるものであり、白氏の諷諭の精神を為政者への教訓として受け取り、謂わば教訓物語ともいうべきものに作り上げているのである」^⑮。『徒然草』の『白氏文集』受容とこれら中世の『文集』に対する新たな解釈傾向との関わりをどう理解するかなどは今後の課題として考えていきたい。

【注】

- ①久保田淳「出典・源泉・先蹤」『諸説一覽徒然草』明治書院 一九七〇
 川口久雄「徒然草の源泉―漢籍」『徒然草講座四』有精堂 一九七四
- ②戸谷三都江「徒然草の方法―『白氏文集』受容における―」『学苑』四〇九 一九七四・一
 金文峰「徒然草」の研究―『白氏文集』受容考(一)―『岡山大学大学院文化科学研究科紀要』一一・二二〇一・二二
 金文峰「徒然草」の研究―『白氏文集』受容考(二)―『岡大國文論稿』三〇 二〇〇二・三
- ③村上美登志「徒然草」と和製類書―もう一つの漢籍受容―『伝承文学研究』四〇 一九九一・二二
 村上美登志「徒然草と類書」『国文学解釈と鑑賞』六二 一九九七・二一
- ④稲田利徳「徒然草」の虚構性―『徒然草論』笠間書院 二〇〇八
- ⑤稲田利徳「徒然草」と『源氏物語』―『徒然草論』笠間書院 二〇〇八
- ⑥伊藤正義・黒田彰・三木雅博「和漢朗詠集古注釈集成」(大学堂書店一九八九)によると、東大本「和漢朗詠集私注」が「君が為に衣裳を薫すれとも」と訓読しているが、国会図書館本「和漢朗詠集仮名注」と「和漢朗詠集永濟注」が「君が為に衣裳に薫すれとも」と訓読している。
- ⑦「徒然草」第九段・「言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じ事、また、今さらに言はじともあらず。」
- ⑧相田満「朗詠注釈の和漢―朗詠注釈問題考―」『和漢古典学のオントロジ』勉誠出版 二〇〇七。
- ⑨稲田利徳「徒然草」と『無名草子』―『徒然草論』笠間書院 二〇〇八
- ⑩伊藤正義・黒田彰・三木雅博「和漢朗詠集古注釈集成」(大学堂書店一九八九 第二卷上の解題、注8の相田氏論文によると、国会図書館本『和漢朗詠注』は見聞系朗詠注に属するもので、その書写は寛永二年(一六四四)であるが、見聞系朗詠注の成立は院政期以前に遡れるとされている。
- ⑪拙稿「『徒然草』における漢籍受容の方法」第二十五段「桃李の言はねば」をめぐって―『国文学研究資料館紀要』三九 二〇一三・三二
- ⑫安良岡康作「徒然草全注釈」角川書店 一九七七。なお、西村阿紹・末本文美士『観心略要集の新研究』(百華苑一九九二)によると、『観心略要集』現存三本の中、寛文十一年刊本は「夕陽之前愛子孫」と作るが、残る寛永三年刊本と無刊記刊本は「夕陽之前愛子孫」と作る。
- ⑬玉上琢彌・紫明抄・河海抄」角川書店 一九七八。なお、紫明抄が大いに依拠した『光源氏物語抄』(異本紫明抄)も同じ箇所(白詩を用いて注しているが、「夕陽愛子孫」となっている(源氏物語古註釈叢刊「源氏釈・奥入・光源氏物語抄」武蔵野書院二〇〇九)。
- ⑭「枕草子」(田中重太郎「校本枕冊子」古典文庫一九五〇)能因本第二百一一段に「はるかなるせかいにある人の、いみじくおほつかなくいかならんとおもふに、文をみればたゞいままさしむかひたるやうにおほゆる、いみじき事なりかし」とある。『無名草子』(新潮日本古典集成『無名草子』新潮社一九九二)に「つれづれなる折、昔の人の文見出でたるは、たゞその折の心地して、いみじくうれしくこそおほゆれ。まして亡き人などの書きたる物など見るは、いみじくあはれに、歳月の多く積りたるも、只今筆うち濡らして書きたるやうなるこそ、返す返すめでたけれ。たゞさし回ひたるほどの情けばかりにてこそ侍れ、これは、昔ながらつゆ変ることなきも、めでたきことなり」とある。注9稲田氏の論文に詳しい。
- ⑮『平家物語』巻七・青山の沙汰(新編日本古典文学全集『平家物語』小学館一九九四)に「村上上の聖代応和のころほひ、三・五夜中新月の色、白くさえ、涼風颯々たりし夜牛に、帝清涼殿にして玄象をそ遊ばされける時に影の如くなる者御前に参じて優にけだかき声を以て唱歌をめだたうつかまつるとある。『増鏡』新

鳥守（井上宗雄）『増鏡全訳注』講談社一九七九）に「松の柱に葦ふける廊など、けしきばかりこそぎたり云々はるばると、見やらるる海の眺望、二千里の外も、のこりなき心地するいまさらめきたり」とある。

⑯太田次男「国立公文館内閣文庫蔵『管見抄』」『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究中巻』勉誠社 一九九七

⑰太田次男「真福寺藏新樂府注に見える教訓と武家社会」『旧鈔本を中心とする白氏文集本文の研究下巻』勉誠社 一九九七

参考文献

『徒然草』本文は鳥丸本を底本とした三木紀人『徒然草全訳注』（講談社一九九二）による。正徹本を底本とした久保田淳校注新日本古典文学大系『方丈記・徒然草』（岩波書店一九八九）を参考。

『白氏文集』本文と詩番号は那波本を底本とした平岡武夫・今井清『白氏文集歌詩索引』（同朋舎一九八九）による。南宋紹興本を底本とした謝思煒『白居易詩集校注』（中華書局二〇〇九）を参考。訓読は神田本（太田次男・小林芳規『神田本白氏文集の研究』勉誠社一九八二）、金澤文庫本（『白氏文集・金澤文庫本』勉誠社一九八三）、万治元年刊立野春節訓点本（長澤規矩也編『和刻本漢詩集成九』汲古書院一九七七）を参考。

川口久雄・志田延義校注日本古典文学大系『和漢朗詠集』岩波書店一九七三

伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著『和漢朗詠集古注釈集成』大学堂書店 一九八九

小町谷照彦・後藤祥子校注・訳新編日本古典文学全集『狭衣物語』小学館一九九九

和歌はすべて『新編国歌大観』（角川書店一九八三）による。

金子彦二郎『平安時代文学と白氏文集 句題和歌・千載佳句研究篇』培風社 一九五五

阿倍秋生・秋山慶・今井源衛・鈴木日出男校注・訳新編日本古典文学全集『源氏物語』小学館 一九九六

* 討論要旨

村尾誠一氏は、発表の中で取り上げられる事例が本当に『白氏文集』の影響であると言えるのか疑問を呈した。例えば五十四段の「あはれ紅葉を焼かん人もがな」は影響を受けていることが全く間違いないが、「紅葉散らしかけなど」や「ありつる苔のむしろに」は話中の坊主たちのいたずらであり、『白氏文集』の影響と考えるのは難しくないと指摘した。発表者は、『徒然草』に引用される漢詩文を辿ることは非常に難しいことを認めた上で、今回挙げた例は全て古注釈で指摘されたものであると補足した。仮に『白氏文集』の句を念頭において紅葉と苔を話の舞台に設けたのなら興味深いと考えて例示したと回答した。村尾氏からパロディ的な面白さの意かとの確認があり、発表者はそれを肯んじた。

楊曉捷氏は、漢籍を受容すること自体の格好良さという側面もあり、パロディ的側面もあることを踏まえると、語彙レベルのみの追求には自ら限界があり、語彙以上の遊び、格好良さ、捻りの検証が次の課題になるのではないかと指摘した。それに対して発表者は、『徒然草』全体の思想およびその『白氏文集』との共通性に関わる課題として向き合っつてゆきたいと回答した。

